AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2018.7) 平成29年度:53.

放射線治療の基礎知識に関する病棟看護師の現状 ～放射線治療室看護師の認識との比較～

平 千亜紀, 村上 舞, 塩谷 今日子

# 放射線治療の基礎知識に関する病棟看護師の現状
## ～放射線治療室看護師の認識との比較～

○平　千亜紀[1)]　村上　舞[1,)]　塩谷　今日子[1,)]

[1)]旭川医科大学病院　5階東ナースステーション

キーワード：放射線治療　基礎知識　有害事象

### 背景と目的

当病棟は外科系混合病棟であり、女性生殖器・口腔がんに対する化学放射線療法、脳・骨転移などに対する放射線治療を受ける患者が入院し治療している。しかし、病棟看護師が直接導入に関わることが少なく、放射線療法を受ける患者の看護に不安を抱いているのではないかと感じていた。

放射線看護教育に関して多くの先行研究でも、基礎看護教育不足が指摘されており、知識不足と教育の必要性、放射線治療室からの情報発信の必要性について述べられている。しかし、対象となる疾患や治療装置・治療方法などが違う背景では、必要とされる知識や看護も異なってくるため、現状把握と看護の質の向上に向けた取り組みが必要であると考えた。

そこで、今回、放射線治療の基礎知識に関する病棟看護師の現状と放射線治療室看護師が考える病棟看護師に必要な知識を明らかにすることを目的とし、調査したので報告する。

### 方法

1. 研究期間：2017年3月～5月
2. 対象：病棟看護師20名・放射線治療室担当看護師5名
3. 方法：先行研究をもとに独自に作成した選択記述式アンケートを用いて調査する。
4. 調査内容
   ① 病棟看護師：基本属性・放射線治療の基礎知識（放射線治療で用いられる放射線の種類・当院の治療で使用されているエネルギー・皮膚の印・照射野の確認方法・総線量と治療回数・治療回数と累計線量の確認方法・効果出現期間・特殊治療・患者用パンフレット）・部位別（脳・頭頸部・全骨盤・骨）有害事象（急性期症状・晩期症状）・看護実践内容（項目ごとの実践状況）
   ② 放射線治療室看護師：①同様の内容が病棟看護師に必要かあまり必要としないか
5. アンケートを単純集計し比較する

### 倫理的配慮

本研究は研究者の所属する倫理委員会の承認を得て行った。倫理委員会承認番号：16193

### 結果

病棟看護師アンケート：回収率95%。放射線の種類は「知っている」が16名であった。しかし、内容の記載はほどんどなく、記載れていても正しいものなかった。使用されているエネルギーは「知っている」が0名、皮膚の線の色と違いを「知っている」は3名であった。皮膚の印の管理、照射野・総線量・治療回数・累計線量の確認方法・患者用パンフレットの内容は「知っている」が15～18名であった。効果出現時期は「知っている」が6名であった。放射線治療有害事象に関しては、「知っている」は主に急性期症状に関してが多く、晩期症状は少なかった。部位別では、脳：急性期は「宿酔」「脱毛」「脳浮腫」「皮膚炎」「全身倦怠感」、晩期は「脳壊死」が多かった。頭頸部：急性期は「口腔粘膜炎」「咽喉頭粘膜炎」「皮膚炎」「宿酔」「唾液腺障害」「味覚障害」「倦怠感」が多く、晩期は、「唾液腺障害」「味覚障害」が5～6名であった。全骨盤：急性期は「腸炎」「宿酔」「皮膚炎」「倦怠感」「膀胱・尿道炎」「骨髄抑制」「食欲不振」、晩期は「腸管穿孔」「慢性膀胱炎・膀胱出血」「腸管狭窄・癒着」「腸閉塞」が多かった。骨：急性期は「宿酔」「悪心・嘔吐」「皮膚炎」が多く、晩期は記載が少なかった。看護実践では、治療部位・照射野の確認は「部屋担当になったら毎回している」が15名、総線量と回数の確認は、「部屋担当のとき時々している」が12名、治療回数と累計線量の確認は「部屋担当のとき時々している」が10名であった。放射線科医師からの説明内容の理解状況確認・放射線治療室での説明内容の理解状況確認は「部屋担当のときしている」が13～15名であった。有害事象悪化予防指導は「部屋担当のとき時々している」が11名、有害事象に対するセルフケア指導は「部屋担当のとき時々している」が9名「部屋担当のとき毎回している」が8名であった。

放射線治療室看護師アンケート：回収率100%。放射線治療の基礎知識に関しては、ほぼ全員が病棟看護師にとって「必要」と回答している。有害事象は主に急性期の症状が「必要」と回答していた。部位別有害事象も急性期症状が「必要」で、頭頸部は晩期有害事象の「味覚障害」も「必要」の回答が多かった。意見として「病棟では急性期有害事象への理解・介入が必要」「食事・疼痛緩和など具体的なケア内容の知識が必要」「退院時指導の時には晩期症状の理解も必要」などがあった。

### 考察

アンケート結果から、病棟看護師の放射線の種類に関する理解が不明確であり、エネルギーの違いの理解も不十分であった。治療で用いられる放射線は種類やエネルギーにより体表面からどの深さでピークがくるかが異なるため、患者観察や予測を持ったケアに必要な知識である。さらに、一般的な有害事象は知っているが、効果出現時期の理解も不十分であり、部位別有害事象の急性期症状と晩期症状の区別が曖昧となっていることにつながっていると考える。照射野・治療回数・線量などの情報は、その都度確認していることが分かったが、種類やエネルギーの違い・効果出現時期の理解が不十分であるため、時期に合った適切なケアにつなげられていない可能性がある。放射線治療室看護師アンケートからも放射線の基礎知識の理解は必要と考えられており、病棟看護師は主に急性期有害事象に対する介入を期待されている。放射線治療を受ける患者への導入は、主に外来・放射線治療室で行っており、病棟看護師が、最初から説明・患者指導に関わる機会が少なく、さらに、周術期や化学療法の患者に比べて、直接ケアの機会が少ないことも影響していると考える。放射線治療の基礎知識を強化することで、時期に合った適切なケアにつなげていくことが必要である。

### 結論

1. 放射線の基礎知識のうち「放射線の種類」「使用されているエネルギー」「効果出現時期」の知識が不十分である。
2. 一般的な有害事象は理解しているが、急性期症状と晩期症状の区別が曖昧である。
3. 放射線治療室看護師は、「放射線の基礎知識」「急性期有害事象」の知識は必要と考えており、病棟看護師の知識が不足している部分への学習強化が必要である。
4. 「放射線の基礎知識」を強化することで、時期に合った適切なケアにつなげていけることが示唆された。